

---

# 三人の天の御遣い・改

S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三人の天の御遣い・改

### 【NZコード】

N4104X

### 【作者名】

S

### 【あらすじ】

事故に巻き込まれ外史に飛ばされた  
せせらぎ終夜、古城矢吹、そして北郷一刀。  
この三人は外史でどの様に生きるのか。  
そして彼等は乱世を治めることが出来るのか?  
イレギュラーの一人を巻き込んだ外史が今始まる。

## 一話 序章（前書き）

こんにちわ～  
再挑戦です。

やっぱり少し設定を変えます。

何と言うかまあ、変えたのは色々です。

何と言うかもしかしたら前作の『真・恋姫？無双三人の天の御遣い』

とは

全くの別作品になるかもしだせんがよろしくお願ひします。

では、始まり～

## 一話 序章

ある三人の少年が道を歩いている。

「なあ、一刀」

ある一人の少年に話しかける。

その少年の名は『古城矢吹』。

三人の中でも最も正直で最も義理人情に厚い少年と言えるだろ？

「何だ？ 矢吹」

矢吹に話し掛けられた少年は『北郷一刀』。

三人の中では最も優しいが『悪』と言う人種には全く容赦しない少

年。

「何で俺達って彼女が居ないんだろうな？」

「お前はバカか？ 何故そんなに欲望に正直なんだ？」

そう呆れた表情で言つたのは『瀧終夜』。

三人の中で最も冷静で現実主義者。

「終夜は現実主義過ぎんだよ  
もっと、夢を見ようぜー」

「バカか……夢を見過ぎるといつか失望するぞ」

終夜はそう冷たく言い放つてゐるが別に矢吹のことが嫌いな訳では

ない。

むしろ親友として信頼している。

「失望しても良いから夢見たいんだよ！」。

「いつか、女の子だけの島に漂流したいんだよ！」」

「「はあ……」」

その言葉に一人は呆れて溜め息をつく。

そのまま一人は矢吹をおいて歩いて行く。

それを見た矢吹は慌てて走つて一人に追いつく。

「しかし……矢吹の言つ」とも確かか……」

「「え？」」

終夜が今まで矢吹の言つとに賛同したことは無い。  
なのに今賛同したことに一人は驚いている。

「矢吹の言つ通りかもしだれん……」

こんな退屈な人生を俺達は送つて死んでいくんだからな、夢を見て  
いた方が人生は  
楽しいかもしだれん」

「「…………」」

終夜の言つたことに一人共賛同しているらしい。  
俯いて黙ってしまった。

「二人共そろそろ行くぞ。

帰りが遅くなると不味い」

「「ああ」」

二人がそう返事したのを聞いて終夜は歩き始める。  
すると……

「そこの三人！危ないぞ――――！」

「「「え？」」」

ド「オオオオオツン！」

そんな轟音が響き渡り三人の居た所に鉄骨が落ちた……

## 一話序章（後書き）

始まりは大体こんな感じです。  
馱文ですがこれからよろしくお願いします。  
では、また次回。

## 一話 それぞれの道へ（一刀編）（前書き）

こんにちわ～

まあ、まずは本編の主人公の一刀から行つてみましょう。  
主人公一人の　を変えました。  
では、始まり～

## 一話 それぞれの道へ（一刀編）

一体どうなったんだ？

俺は矢吹や終夜と一緒に歩いてて……

それで……と言つかまず、何で俺の目の前が真っ暗なのかが疑問だ。  
あ、目を瞑つてるからか……

そんなことに気付かないなんてな。

取りあえず目を開けるか。

俺はそう思い目を開けてみると、  
すると……

「何と云ひ」とでしょう？

なんてギャグを言つほど俺は余裕がある訳無い。  
俺の目の前には日本なんて云ひ國の面影は無い。  
もしかして……

「タイムトラベルか？」

俺は思い当たる言葉を呴いてみる。

この前テレビでやっていたがタイムトラベルは絶対に無いとは言いつ  
切れないうらし。

過去にはいくつかの例があり突然行方をくらませた者が  
未来に起きることを言い当てるなんて例もある。

「はあ～どうやつたら元の世界に戻れるのかなあ……

はつかり言つて元の世界に戻れる自信が無い……

「『これからどうすれば良いんだよ』……」

俺はそう言しながら空を見る。  
空には雲がある。

雲は俺に起つたことは極小さなことだと云ひ様に空を泳いでいた。

「『生きている限り無意味なことなんて無い』か……  
師匠、今、俺に起つてることも意味はあるんですか？」

俺は空に向かつて一人呟いた。

でも、その質問に答えてくれる人なんて居る訳が無い。

「じつとしてもしようがないな。  
歩くか……ん？これは……」「

近くにあつたのは俺の愛刀『瓶割刀』

俺はそう呟きながら瓶割刀を拾つ。  
すると

「何でこんな所に……確かに本家に保管されてるんじゃ無かったか？」

「おー、兄ちゃん！珍しい服を着てるじゃねえか！」

「は、早くその服を渡すんだな」

「早くしな！」

声のする方を振り向いてみるとそこは昔風の服を着た男二人が居た。

「（やつぱりタイムトラベルか）  
悪いけどこの服を渡す訳にはいかないんだ。  
それでも無理矢理この服を奪おうって思うつんなら……」

俺は自分の相棒である瓶割刀を抜いた。

瓶割刀は戦国時代初期の一刀流の始祖、伊藤一刀斎の愛刀。  
一刀流から様々な流派が派生したらしいが俺が祖父から受け継いで  
師匠の下で昇華させた流派はどんな歴史書にも載っていない流派『  
不活一刀流』。

その流派の真髓は至極単純。

敵は必ず活かさずに抹殺すること。

そして、俺は今警告している。

『俺の敵になりたく無ければ今すぐ去れ』と。

「ふざけるな！やつちまえ！」

「「おひー。」」

残念だ……

あまり人は殺したくないんだがな……  
すると

「待てい！」

その声のした方を見ると一人の少女が居た。

その少女はこちらに来て盜賊達の前に立ちふさがった。

「何もんだ！」

「一人の少年を三人掛けで襲う様な外道に名乗る名は無い！」

少女はそう言って三人の盗賊達に襲い掛る。  
なかなかの連撃だな……  
だが、まだまだ……

「お前等逃げるぞ！」

盗賊達の頭領らしい男はそう叫んで逃げて行った。

「待て！」

少女は盗賊達を逃がす気が無いらしい。  
追いかけていく。

「大丈夫ですか〜？」

「え？」

そんな呑気な声を聞いて声のする方を向くとそこには頭に人形（？）  
を乗せた少女が居た。

「この辺りは盗賊が比較的に少ない地域なのですが……  
運が悪かったですね」

一応話しを合わせた方が良いと思い話を始める。

「ああ、全くだ……

それよりここどこだ？俺は旅人でこの大陸には来たばかりなんだが」

「旅人さんですか〜」こは陳留の郊外です

陳留？確かに魏の領土だつたような……

あ〜三国志の時代にタイムスリップしたのか……  
一番来たく無い時代だな……

「そうか……それと序で聞くけど」こちでやつちやいけない」とつてあるか？」

「あります」

そつ言つたのは眼鏡をかけたしつかりしていそうな少女。

「他人を認められても無いのに真名で呼ぶことです。

真名と言つのはとても神聖な名でその人の生き様を示す物です。  
もし、真名を認められて無いのに呼んだら……首を刎ねられても仕  
方ありません」

「おいおい……物騒だな……

まあ、こつちではそれが当たり前なんだな？」

真名つてもしかして『誓名』と同じようなものかな?  
でも誓名を知つてる人なんてそつは居ないだろうなあ……

「その通り」

先程盗賊達を追つていた少女が戻つて來た。

「さつきは助けてくれたありがと」

「いえ、本当なら助けが要らないと顔に書いてありましたが厄介事に手を出すのが面白くて」

「……なんて面倒な性格

「ははははは…良く言われます…」

分かってるなら治せよ……

「それより美しい得物ですね。  
何と言つ物ですかな?」

「ああ、刀って言つてな。  
名は瓶割刀つて言つんだ」

「瓶割刀ですか?

瓶でも割れるのですか?」

「ああ、何でもある家の瓶に隠れていた賊を瓶<sup>ビ</sup>と真つ一いつにして  
そう呼ばれたらし」

そつ言いながら俺は瓶割刀を鞘にしまつ。

「まつ…」

あ、やばい……

何か地雷踏んだ様な気がする……

「や、それより!君達の名前を聞かせてくれ。  
ずっと『君』じゃ何かさ」

「そうですね。

我が性は『趙』名は『雲』字は『子龍』」

おいおい……嘘だろ？

あの趙子龍だと？

まじかよ……

「私は戯志才と名乗つておきましょう」

『名乗つておきましょう』って偽名かよ……

「私の性は『程』名は『？』字は『仲徳』です～」

祖父さん……俺は今とんでもない所に来てます……

あの有名な三人が女人になつてます……

何この状況……

まじありえないんですけど……

おっと！俺も名乗らないとな。

「俺は北郷一刀。

この大陸の人の名前とは少し違つ所があるけどそれが俺の名前だよ

「それより北郷殿」

「ん？」

「私と手合させ願いたい」

騙せなかつたか……

「さうがない……

「そつちの得物が折れるかもしけないけど良いかい？」

「良いでしょ」

自信満々な顔だな  
俺無傷で済むかな……

「星ちゃん、官軍です~」

程？がそつ言つてとある方向を指す。

その方向には馬に乗り鎧を着た者達が居た。

「つむ……北郷殿残念だが手合させはまた今度。  
官軍が絡むと面白いことも詰まらないことになるのでな

「さよなら～」

「また今度」

三人はそつ言つてその場から立ち去つた。

俺はそれを呆然と見てて……

俺はそれを追え無くて……

そして、その場に残つてしまつた。

そして、瞬く間に軍に囲まれてしまつた。

俺は一応瓶割刀に手をかける。

「華琳様！」奴は……

「違つわね……田撃情報と一致しないわ」

「ならばこの者は何者でしょ、ア？」

何だか俺抜きで話しか進んでるな  
はあ

「あなた、何者？」

俺は北郷一刀

卷之三

「貴様！華琳様に向かつてその口の利き方は何事だ！」

そう言いながら黒髪の少女は俺に向かつて斬りかかつて来る。  
だが……

ガキンツ！

「攻撃が直線的だな」

俺は瓶割刀を瞬間に抜いてその少女の攻撃を受け止めていた。

「ふう……あ、そこの、……この子の上司っぽい人、」

早く止めた方が良しよ  
俺の流派の真體に敵を必ず打殺することだ

「一春蘭やめなさい」

「あれ、御意…」

俺に斬りかかつて来た少女は上司らしこ少女の命令に従い剣を取める。

「この子が申し訳ないことをしたわね。

私の性は『曹』名は『操』字は『孟德』み  
え？

「姉者が申し訳ない。

私の性は『夏候』名は『惇』字は『妙才』だ

はい？

「……私の性は『夏候』名は『惇』字は『元讓』だ

まじ？

「まじかよ……」

「どうしたのかしら？」

「いや…………ううつと…………今の状況に混乱してゐる

「」「」「?」「」

曹操に夏候淵や夏候惇つてめちゃくちゃ有名じやん……

趙雲とか、程?とかが女の子つて本当にすごい状況だ……

「えつと……曹操さん、今の俺はね、あなたが普通の最中にいきなり変な所に連れてこられて

田の前に劉邦と項羽って名乗る人達が居るっていう状況なんだよ」

「「「はあ？」」

「いや、やう言いたくなる気持ちはものすげく分かるんだ。でも、本当なんだよね」

「あなたは私達よりもずっと先の時代から来た。そう言つてゐのかしあつ。」

「流石曹操徳、理解が早い」

「！私の字を知つてゐるのもやう言つことなのね」

曹操さんは少し俺を警戒してゐる様な態度を取る。それを見て夏候惇と夏候淵もいつでも俺を殺せる構えを取る。

「まあ、この話はここまで良いでしょ？」

曹操さん達はこんな所で何をしてに来たんだい？」

「私達は太平要術の書を盜賊に盗まれたから追いでに来たのよ」

確か南華老仙が書いた奴だよな？」

多分さつきの奴等が取つて行つたのかな？」

「さつき盜賊達が来てたけど？」

因みにその盜賊達の特徴はヒゲのノッポとチビヒテブ」

「華琳様、目撃情報と一致します」

「そうね。

あなたしばらく私達の調査に協力なさい」

「分かったよ。

俺にはこの時代を生きる手段が無いからね」

そして、俺は彼女達に協力することになった。

## 一話 それぞれの道へ（一刀編）（後書き）

ぐだぐだになつてしまひました……

申し訳ありません……

華琳達は次回一刀に真名を紹介します。

それと『誓名』の意味ですがそれも次回紹介します。

話しさは変わりますが、を変えたのは一刀と終夜です。

これからは上手く出来るように頑張ります。

では、また次回です。

10／12 華琳達の自己紹介の所を修正しました。

## 二話 翡翠の理想（前編）（前書き）

こんにちわ～

ちょっと予定変更で華琳達が一刀に真名を預けるのは後篇にします。  
今回は前、中、後篇の三編成です。  
では、始まり～

## 二話 翡翠の理想（前篇）

「…………」

俺が見ているのは城壁の下に広がる光景。

兵士は戦に使つゝ矢を運び完全装備。

「俺達の居た時代なら絶対こんなことはあり得なかつたよなあ……いや、でも、この光景は既に体験済みか……」

「ここに居ると『あの頃』を思い出す……」

「北郷、どうしたのだ？」

「ああ、夏候惇か。

いや、何でも無いけれど……何でもな……」

「？」

「彼女達は知らなくていいことだ……

俺達みたいな奴等のバカな物語なんてないのか？」

「それよりお前、装備品と兵の確認の最終報告を曹操にしなくて良いのか？」

「一刀の意通りね

「か、華琳様！？」

声のした方を見るとそこには曹操と夏侯淵が立っていた。

……俺、ちゃんと周囲を警戒してたのに気がつかなかつた。

「数は揃つてこゐるの?」

「はい!北郷に声をかけられた為に報告が遅れました!」

「こいつ俺の所為にしやがつた……

「その一刀には糧食の最終点検の帳簿を受け取つてくるに伝えておいた筈だけど?」

「はい、受け取つておいたよ」

「以外と仕事出来るじゃない?」

「常識範囲内だよ。それより……」

帳簿を私ながら俺はいつ書いた。

「ここには男嫌いがいるのか?」

「……はあ?」「……

「こやな、やつきの話なんだけどな。  
やつき帳簿を取りに行つた時に監督官に会つた時に何と言つたか……

監督官からものすごい罵倒をもらつてさ……  
それで『ここには男嫌が集まる所なんじゃないか?』とかそんなこ

とを思つてさ……

それで（以下略）」

「わ、分かつたからやめなさい」

そう言われて俺は素直に愚痴をやめた。

「まあ、良いんだけどさ」

「どうやつたら、あれだけの言葉が出るのか不思議よ」

そう言いながら曹操は帳簿を開いて帳簿を読み始めた。  
するとみるみる曹操の表情が険しくなつていいく。

そして、読み終わり

「秋蘭、」の監督官は何者?」

「はつ、先日士官してきた新人です。  
仕事の手際が良いので今回の食料調達の担当をさせてみたのですが  
何か問題でも?」

「！」に呼びなさい、大至急よ」

「はー!」

何かあつたのかねえ……

まさか、ものすごく完璧だつたとか?

それで曹操にスカウトされるとか?

それだつたらすごいな……

じまいくじて

「遅いわね……」

「遅いですね……」

「気長に待とうぜー

田や雲を見る限りそんなに時間は経っていない筈なんだけど……

「…………」

「…………」

「…………」

沈黙が痛い……さつきから曹操が殺氣を放ってるんだ。  
霸王の霸気がものすごく痛い……

「華琳様、連れて参りました」

あ、さつきの罵倒猫耳女だ。

「お前が食料の調達をしたのかしり?..」

「はい、何か問題があつましたでしょ?」

「指定した半分の量しか準備出来て無いのに問題が無い」と思つ?..

半分!?!?こいつ余程バカか!?!?曹操に首を刎ねられるぞ!..

「「」のまま出撃したら行き倒れになる所だったわ。  
そつなつたらびひすみつもりだつたの？」

「いえ、そつはならない筈です」

成程……こいつ余程の天才か……

黙つて見てよつじやないか、曹操に向かってこんなことを囁つか

……

「理由は三つあります」

「説明なさい。納得出来る理由なら許してあげるわ」

何か嫌な予感が……一応どんなことが起きたも対応できるよつておへか……

「一つ目は曹操様は慎重なお方故、必ず「」自分の田で糧食の最終確認をいたします。

そこで問題があれば「」して責任者を呼ぶ筈です。ですから生き倒れにはなりません」

おい、そんなことを言えば……

「馬鹿にしてるのー?春蘭」

「はつー!」

やつぱりかよ……

夏候惇はそのまま剣を振り降ろしその少女を真つ一いつ……

ガキンツ！

出来なかつた。

夏候惇の剣は俺の瓶割刀に阻まれて少女に近づいていなかつた。

「曹操、約束は？」

俺はいつもと変わらない声で聞いた。

霸氣は纏わない様にただ普通の声で。

少女は俺が夏候惇の剣を受け止めたことに驚き過ぎてしているのか反応が出来ずにいた。

「そ、そうだつたわね。次は？」

「は、はい。

一つ曰は糧食が少なければ身軽になり輸送部隊の行軍速度が上がり討伐全体にかかる時間が少なくなります」

ん？それって……

「秋蘭、行軍速度が上がつても移動する時間が短くなるだけではないのか？」

討伐にかかる時間は半分にならない……よな？」

「ならないぞ」

「良かった、私の頭が悪くなつたと思つたぞ」

あ～夏候惇、大丈夫だ。

それ以上悪くならないから。

「良かつたな」

夏候惇、その台詞は口の端を吊り上げながら言つてじやないぜ？

「三つ四は？」

「私の提案する策を採れば戦闘時間は更に短くなるでしょう。よってこの量で充分だと判断しました」

お～お～……」こつとんでもない奴だな……

「曹操様！…どつかこの荀？めを曹操様を勝利に導く軍師として麾下にお加えくださいませ…」

！荀？だと！？『王佐の才』！？  
まさかこんな天才と会えるとは……

「曹操、こいつは麾下に加えるべきだ」

俺は曹操に近づき曹操にしか聞こえない様に話す。

「一刀？」

「俺がこの時代よりもはるか先から来たと詮つの言つたよな？」

「ええ」

「荀？は俺達の時代で『王佐の才』と呼ばれている」

「つまり相当天才と言ひついとかしら？」

「間違い無い」

俺は曹操から離れてさつき俺が居た所に立つ。  
若干一名がものすごい表情で俺を見る……

「なら荀？、今回の討伐行を糧食半分で成功させなさい」

「御意！」

流石にあんまり人が死ぬのは見たくないからな……  
何とかなつたか……だけど……荀？は大丈夫なのか?  
糧食半分とか絶対きついだろうに……  
そんなことを思いながら俺は今から人を殺しに行く覚悟を決めた。

三話 翼王の理想（前篇）（後篇を）

10 / 13日修正しました。

## 四話 翡翠の理想（中編）

荀?を仲間に加えた後盜賊討伐の為に行軍していた。  
しかし……

「俺の感覚だと今回の行軍速度は普通の行軍速度よりも少し早い程度だと思つんだけどな……」

糧食も半分しか無いからもう少し急ぐべきだと思つんだけど……  
そう思つていると隣に居た夏候淵がこいつ返した。

「それは私も思うがそこは荀?の腕前しだいだらう」

「やうだやうけいど……すまることになつたよなあ」

「つむ……」

糧食を半分で終わらせるとか言つて無茶がありすぎだよなあ……  
お?噂をすれば……

「お~い、荀?！」

「気安く話しあげないでくれない?  
耳が穢れるんだけど」

「口が悪いなあ……

まあ、そんなことは置いといて……  
今回の一件大丈夫なのか?

糧食を半分で済ませるとか無茶にも程があると思つた?」

「別に平気よ。

曹操様の軍の討伐にかかる時間や

鍛練の精度を測つた結果を元にして計算したんだから

すげえ……もしかしたら終夜と同等かも……いや、そんなことは…

…あるのかな?

「何よその変な顔は」

「何でもないって。

といふかさつさのやり取りは肝が冷えた。な、  
夏候淵?」

「つむ、北郷の言つ通りだ。

そもそも北郷が姉者の剣を受け止めなければ  
今頃この場には居なかつたぞ」

「あの脳筋があんないとずるつて思ひ?

あんな脳筋が居なかつたらもう少し安全にやれたわよ

夏候惇には絶対聞かせたくない言葉だな……

「お前達、ここに居たのか

「ひゃわつー?」

やべえ……思わず間の抜けた反応しちゃつた……  
夏候惇だから別に少し不思議に思つだけだよな?  
大丈夫だよな?

「何だ？その間の抜けた反応は？」

「いや、何でもない。

といひで何かあつたのか？」

何とか誤魔化せたか？

「ああ、お前達全員華琳様がお呼びだ付いてこい」

良し！何とか誤魔化せた！

馬鹿で良かつた！

「分かった」

「うむ」

「了解

そつ返事をして俺達は夏候惇の後に付いて行つた。

曹操の居る場所

「どうしたんだ？曹操」

「何でも前方に謎の集団が居るらしいのよ。  
数は大したことは無いらしいけど……」

「ああ、成程。

それで偵察隊を出すかどうか悩んでるだな

「ええ、荀？、どうあるべきかしりへ。」

「偵察隊を出しましょ。」

夏候惇、北郷あなた達が指揮を執つて」

夏候惇もかよ……

色々ヤバい様な氣がする……

「待つた、俺だけで良い」

「は？何を言ひしるの？」

「もし盗賊だつたら夏候惇は何も考えずに全滅せりまつだ。  
上手くやるから俺だけにしてくれ」

その言葉に荀？は納得が行つたのだろう。

言い直した。

「やはり北郷だけで行きなれー」

「しゃつうりあん、何だか馬鹿にされたいる様な氣がするぞお」

「姉者はものす」へ強いから偵察程度には出せなこと言つてこるのは  
や。

「わうかーなりば良こー。」

「こいつ俺の予想以上にバカだ……

どうしようも出来ないほどにバカだ。」

「……ああ、姉者は可愛いなあ」

「ん? もしかして夏候澁つて……シスコン? マジかよ……

「一刀、早く行きなやつ」

「あ、ああ」

取つあえず氣にしなこでおいで……

謎の集団の居る場所

「ねつやあつー!」

ド「オオオンッ!

俺は今信じられない光景を見ている。

「うつやあつー!」

バアアーンー

だつてそうだらつ?

目の前にあんなに重たそうな持つて盗賊らしき連中を倒してゐるんだ  
ぜ?

我が目を疑いたくなるだろ?  
だが……

「はあはあ……数が多すぎるよお」

もう体力切れらしい。

それもそうだろう力がいくらあるとはいえ彼女は少女なんだ。  
体力には限界がある。

「野郎共一斉に掛けられ！」

「つー！」

少女が顔を歪めた時俺は考える前に体が既に動いていた。  
俺はまず瓶割刀を抜いて一番近くに居た男の首を刎ねた。  
次にそれを見た仲間の男が襲い掛ってきたのでそれも刎ねた。  
盗賊達は一斉に襲い掛って来るが俺はそれを気にせず一人づつ最小  
の動きで首を刎ねていく。  
そして残り五人にまで減った時盗賊達は撤退を始めた。

「ふう……君大丈夫？」

「え、あ、はい」

「おいー！」

俺は付いてきた兵士を呼んで指示を『』えた。

「はつー！」

「撤退して行つた兵士を追え！  
もしかしたら敵の本拠地を割り出せるかも知れない！」

「はあはあ……数が多くあるよお」

「はつ！」

さつきまで全滅させようかな？  
つて思つてたのは秘密だ。

瓶割刀を鞘にしまつてさつきまで一人で戦つてた少女の方を向いた。

「なあ、何で一人で戦つてたんだ？」

「それは……」

少女が説明しかけた時曹操達がやつて來た。

「あ、ごめん、ちょっと待つて。

曹操！こつちだ！」

「つ！」

ん？少女の顔が少し歪んだ様な気が……  
気のせいか？

「一刀、謎の集団はどうしたの？」

「あいつ等は本拠地に逃げてつたよ。

今追わせてるからすぐに本拠地が分かる筈だよ

「あら、気が利くじゃない

「褒めて頂いて恐縮だよ」

「あ、あなた……！」

何だ？殺氣？

いや、そんな邪悪なもんじゃない……けど怒氣は少なからずある。俺はいつでも行動出来るように瓶割刀に手をかける。

「ん？ この子は？」

「お姉さんもしかして国の軍隊…………っ！」

「ああそうだけど…………っ！」

振り降ろされたのは少女の持っていた鉄球だった。  
俺は何とか瓶割刀で防いでいた。

……瓶割刀じゃなかつたら碎けてたかな？

「なっ！？ 貴様何を！？」

「国の軍隊なんか信用出来るか！」

ボク達を守ってくれないくせに税金ばっかり持つて行つて！

「だから君は一人で？」

「そうだよ！ ボクが村で一番強いから町の監を守らな」といけない  
んだ！」

くそ……本気を出せない…………！

「だらああつー！」

「つー！」

『不活一刀流』を背負つた少女を……  
でも……！

一刀……終夜をよろこべね……

あんな」とまもつ……！

「ひー」

「すきあつこうこうこう……！」

「ひー」

しまつた……やひれる……！

「一人共、そこまでよー。」

「え？」

「剣を引きなさいー。その娘もー。一刀もー！」

「は、はーー！」

曹操の霸氣にあてられて少女は鉄球をその場に落とした。  
地面陥没したけどどれぐらいあれ重いんだ？

「一刀、この子の命は？」

「聞いて無いな。

君、名前は？」

「やあ……許緒と言います」

「いつの威圧感のある相手を見るのは初めてなんだろ？な。  
許緒と名乗っていた少女は完全に曹操の空氣に呑まれている。

「やあ……」

そして次に曹操が取つた行動は俺達を驚かせた。

「許緒、『じめんなさい』

「…………え？」

曹操は許緒に頭を下げる。  
その場に居た皆が曹操がそんなことをするとほ思つていなかつたの  
だらう。

全員呆然している。

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向いつの陳留の街で刺史を  
してこいる者よ」

「山向いつの…………？あー、それじゃつーへー、『じめんなさい』

許緒は曹操が名乗るところなり謝つて來た。

「な…………？」

「山向いつの刺史をまはす、立派な方だつて噂を聞いてます！」

それなのにボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは刺史である私が良く知ってるもの。

富と聞いて許緒が憤るのは当たり前の話だわ」

流石曹操だな……

霸王としての實錄がある。

「で、でも…… もうふつー」

それから先を言おうとしたいた許緒を頭を撫でることで黙らせた。

「曹操が良いつて言つてるだろ？」

「どうしても謝りたいって言つんならその力を曹操に貸してやってくれよ」

「あのあなた……」

「ああ、俺は北郷一刀。

今は曹操に協力してる者だ。  
好きに呼んでくれて良いよ。

それからうつむきのまゝにしなくて良いよ」

「は、はい……」

「それと敬語も無しで良いよ」

「うんー。」

「曹操はいつか霸王になる。  
その時になつたら曹操は君の臣も仕つてくれるんじやないか?  
なあ? 曹操」

「曹操はいつか霸王になる。

その時になつたら曹操は君の臣も仕つてくれるんじやないか?

なあ? 曹操」

俺がそう聞くと曹操は力強く頷いてこう言つた。

「ええ、一刀の言つ通りよ。

私は霸王になつて大陸の皆が安心して暮らせる様にするわ

「」の大陸の……皆が……」

「曹操様! 偵察が戻りました!  
盗賊の本拠地はすぐそこです!」

「分かつたわ。ねえ、許緒」

「まずはあなたの邑を齎かす盗賊を根絶やしにする。  
そこからで良いから力を貸してくれないかしら?」

「はいー。」

許緒はその問いに力強く頷いた。

「許緒は取りあえず秋蘭と春蘭の下に付ける。  
分からぬことは教えてあげなさい」

「はい」

「了解です！」

「では、総員、行軍を開始するわ！騎乗！」

「総員騎乗！騎乗っ！」

そして俺達は許緒の四の盜賊を根絶めしにあらゆる為に行軍を再会した。

## 五話 翡翠の理想（後編）

盗賊の本拠地は許緒と会つた所からそんなに離れていない所にあつた。

余程上手く探さないと絶対に見つからなかつただろう。

「敵の数は把握できているのかしら?..」

曹操がそう聞くと夏侯淵が答える。

「はい、およそ二三千と報告がありました」

連れてきた戦力は千と少しだから盗賊達はその三倍の戦力だ。だが、苟?は別に大したことではないという様な表情でこう言った。

「連中は統率力も無く訓練もされていませんから我々の敵ではありません」

「けれど策はあるのでしょうか?糧食の件、忘れていないわよ?」

「無論です」

「うー」と自信だな。

ま、あの荀文若だからそれも当然か。

「説明なさい」

「まず、曹操様は少數の兵を率い、皆の正面に展開してください。その間に夏侯淵、夏侯惇の両名は残りの兵を率いて後の崖に待機。

本隊が銅鑼を鳴らし攻撃の準備を匂わせれば敵は必ず外に出てくるでしょう。

その後曹操様は兵を退いて充分に引き離したといひで夏候淵と夏候淵の両名で敵を叩きます

「それってまさか……

「それはまさか、華琳様を困にしろと言つ訳か！」

やつぱりそうなるよな？

荀？も夏候惇が反対するのは予想済みつて顔だし。  
しょうがない……なら納得してもらひつか。

「なら夏候惇が曹操を守れば良いだろ？  
俺と夏候淵で敵を叩こう」

「ちよっとー何勝手なこと……！」

俺は夏候惇に聞こえない様に小声でこう言った。

「良く考えろ……夏候惇が丁度良い時期に攻められると思つか？  
敵を見た瞬間に突っ込むのが目に見えるだろ？が。

俺なら丁度良い時期を見つけて攻めるから俺に攻める役をやらせろ

すると、荀？は納得した顔で頷いた。

「やはり、敵を叩く役は北郷と夏候淵にやらせます。  
護衛は許緒と夏候惇が」

「よし！許緒！全力で華琳様をお守りするぞ！」

「は～い」

そうして荀？の策の下戦が行われることになつたのだが……

「あれ？曹操達が下がるのが思つてたのより早いな」

そう、俺が思つていたのよりも曹操達が下がつて来るのが早かつた。  
何があつたのだろう？

「華琳様達は無事の様だな。

姉者も無事の様だ」

夏候淵はさう言つと安堵の表情を浮かべる。

「良かつたな」

「うむ

そして、しおりへ経つて……

「北郷、敵の殿だ。  
そろそろ攻めるぞ」

「了解」

俺は刀を抜いてさう返事をした。

「夏候淵隊！撃ち方用意！」

夏候淵の隊の兵士は「」をつがえて……

「敵中央に向けて、一斉射撃！撃ていつ！」

矢を放つた。

それにより敵の兵士に動搖が走る。

俺はそれを見て敵に襲い掛る準備をする。

「夏候淵、援護は頼むぞ」

「良かう。」

「行け！」

それを聞いて俺は敵に襲い掛つた。

さあ、『不活一刀流』の真髓を獣達に見せてやる……

第三者 side

一刀は一振りで確実に敵の数を減らしていく。  
その姿は敵味方限らずすらこうと思わせていた。

『恐ろしい』

と。

敵は恐れ慄き、味方は一刀が敵で無かつたことを安堵する。  
敵は一刀から逃げるよう撤退していく。

それは正しい判断だろう。

もし、逃げずに一刀に挑むのであれば……

その死骸は本当に生き物であつたのか疑う程酷い物になつていただ  
ろう。

「あれが、北郷なのか？」

夏候惇は剣を振いながら一刀の姿を見ていた。  
本来ならばそんな暇は無いが敵は大半が逃げ去っていた。  
この戦場において未だ戦う意思を持つているのはほぼ居ない。  
そして、遂に一刀の周りには『人』が居なくなつた。  
それを確認した一刀はゆつくりと刀を鞘にしまいゆつくりと曹操達の居る方へと近づいた。

「皆大丈夫か？」

曹操達に近づいた一刀が一番に言つた言葉は曹操達を心配する言葉  
だった。

その言葉を聞いてまず一番に反応したのは曹操。

「え、ええ。」苦労れども

次に夏候惇。

「北郷、お前、相当強いな」

次に夏候淵。

「うむ、もしかしたら姉者以上かもしけん」

次に許緒。

「お兄ちやんす」こよー。」

次に荀?。

「死ねば良かつたのに……」

そんな五人の言葉を聞いて、一刀は微笑む。

H H H H H H H H H H

『朴念仁の微笑み』（矢吹命名）によつて五人は陥没した。それに天然鈍感種馬の一刃が気付く訳もなく……

「あれ? どうしたの?」

そう言つた。

ଶ୍ରୀ କାନ୍ତିଲାଲ

溜め息をついた。

何故一刃は溜め息をつかれたのか分からなかつたが一刃は首を傾げながらこう言った。

「なあ、一つ頼みがあるんだけど」

「何かしら？」

「俺、正式に君達に士官したいんだ」

「何故？」

曹操がそう聞くと一刀はこう答えた。

「君達の理想を見て支えてみたいと思つた。

許緒に頭を下げる時、俺は君こそが霸王に相応しいと思つたんだ」

「そう……ならば良いでしょう。

北郷一刀、私の手足となりなさい」

一刀はその言葉を聞いて臣下の礼をとつた。

「御意。

あなた霸道を妨げる全ての障害を取り除きましょう」

「一刀、あなたの真名を聞きたいのだけビ……

あなたの居た所にも真名はあつたのかしり?」

「いえ、ありませんでした。

ですがそれに当たる物はあります。

『誓名』と言う名で、その者の誓を示す物です。

我が誓名は『和刀』と申します。

和を守る刀そして、乱世にある世界を和へと導く刀です

「わづ、あなたの誓名とやらを預かりましょう

「それともう一つお願ひがあります」

「聞きましたよ」

「誓名は簡単に表に出していくない物なのです。

故に余程のことが無い限り誓名で私のことを呼ばないでください」

「良いでしょ、

そうして一刀は霸王曹祖徳の部下となつた。  
彼女を霸王にするといつ誓の下に……

## 拠点話 一刀篇 part 1

何でこんなことになつたんだろう……

俺は今春蘭（誓名を華琳に預けた後に皆預けてくれた）と対峙している。

ことの始まりは俺が適当に城の中を歩いていた時に春蘭に話しかけられた

「一度私と仕合え！」

何ともまあ……春蘭らしい言葉で……

俺も鍛練したかつたし承諾した。

ここで承諾したのがいけなかつた……

彼女はあの『夏候惇』だぜ？

俺もまあ……何と言づか……だけど！

あの『魏武の大剣』と戦うとか真面目にヤバイ。本能が危険信号を発してゐるぜ！

「行くぞ、北郷！」

はい、処刑宣告

しうがない……俺も死にたくないしなあ……  
久しぶりに真面目にやるか……

「ああ、来い……夏候元譲！」

「つ！」

一瞬だけ春蘭は俺の霸気に怯んだ様な顔をしたがすぐに顔を引き締

める。

そして俺に全力で襲い掛る。

その一撃はまさしく大剣を持つ者に相応しい一撃。

かわすことは出来るがその威力は地面に穴を開ける程の一撃。

先程まで俺が居た所には穴が開いていた。

「（）いつ……全力でやりやがった……！  
でも……久々だ……最近矢吹達ともやつてなかつたからな……  
楽しめそうだ……」

「だらあつ！」

「ふつー！」

ガキンッ！

「北郷！中々やるじやないか！」

「そつち（）そー！」

ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！ガキンッ！

「そろそろ私は本氣を出させてもうつむく

「つー！」

あんな馬鹿力でも本気じゃないのかよ……  
でも……そろそろ俺も準備完了だ。  
鈍つてた体も解ってきた。

「だらあつ！」

春蘭の本気の一撃が俺に襲い掛つて来る。  
俺は瓶割刀を鞘にしまう。  
そして……

「不活一刀流……抜刀術……『殺鬼』！」

『殺鬼』……それは有無も言わさず鬼を殺す為に創られた必殺の一撃。

その技は決まつたら鬼を一刀両断する。

「ぐはあつ！」

流石に殺す訳にはいかないから勿論峰打ちだ。  
抜刀術で峰打ちは結構難しかつた。

「春蘭に勝つなんてすごいわね、一刀」

「か、華琳様！？」

「本当に良い勝負だつたよー兄ちゃんー！」

「絶対に偶々よー！」

「うむ、北郷も中々やるじやないか

やつぱり姉妹だな。  
同じこと言つてるよ。

「北郷もつ一度仕合えー今のは油断したー」

「え……」

「『え……』ではないー早く構えるー」

華琳様ー今すぐこちつに勝つて見せますー！」

「そう、期待しているわ

ちよ、そんなこと言つたら……春蘭は……

「はいー。」

やつぱり……

火が付いたやつたか……

「分かつたよ……一度だけだよ?」

「その一度で勝つてやる……！」

その後一度と言わば十回程やつて春蘭が泣いて『もう仕合たくない

ー』とか言つまでも俺はずつと

付き合わされた……

## 六話 それぞれの道へ（矢吹篇）

「うう……」

体中が痛てえな……

何だか高い所から落ちた時みたいだ……

「ううはうううう……」

田の前を見たらとんでもない光景だった。

「完璧な荒野だ……」

日本にこんな所は無いだろうとぐらういの荒野。

「拉致でされたか？」

もっと慌てるべきなんだろうが慌てても向にもならない。

「こは冷静になって考えるべきだ。

「俺の名前は古城矢吹……聖フランチエスカ学院二年……部活は所属していない……

上から鉄骨が落ちて来て……そこで意識が無くなつた」

ここに来た経緯以外の記憶の欠落は無い。  
記憶喪失って訳じやなさそつだ。

「他に何か変わったことは……」

俺はそう思つて自分の周りを見る。

すると、近くに一振りの刀が落ちているのが目に入る。

「これまさか……『童子切』か！？」

『童子切』とは清和源氏の嫡流である源頼光が、丹波国大江山に住み着いた鬼・酒呑童子の首をこの刀で切り落としたという逸話を持つ刀だ。この刀は確か俺の祖父が気に言つて東京国立博物館から買取つて（奪い取つたとも言う）本家に保管されている筈だが……

「何でここに……」

俺はそう思いながら鞘から童子切を抜く。

「人はあんまり殺したくは無いんだがな……」

自分の身を守る物は持つておいた方が良い。

無手でもそれなりには戦えるがやはり不安要素は残る。

俺は近くの岩に近づいて抜刀術の構えをとる。

そして……

「はあっ！」

抜刀術は上手く行った。

岩は俺が斬った所から上が音を立てて崩れ去った。

「ふう……」

俺が抜刀術をした理由は二つ。

一つはこの刀の調子を見る為。

抜刀術を見る限りこの刀の調子は抜群。

二つ目は俺が斬った岩とは違う岩の後で隠れている奴等に警告するためだ。

「いつまでも隠れてんな。

あんた等が何かしない限り俺は何もしない。安心して出て来い」

その警告から少しして岩から三人の少女が出て来た。

変な服を着ているがまあ、そこら辺は気にしない。

問題なのは三人の内一人が相当のやり手だってことだ。

「俺は古城矢吹。あんた等何者だ？」

出来る限り敵意を含めないで聞いたが三人の少女達は未だ警戒を緩めていない。

すると、三人の中でもしつかりしている少女が名乗り出た。

「私は姓を『関』名を『羽』字を『雲長』幽州の偃月刀とは私のことだ」

「…………は？」

ふざけてるようには見えないし……まさか、タイムスリップか？

だとしたら俺はこの時代に連れて來た神を恨みたいな……

俺はこの時代には絶対に來たくは無かったのに……

つて、ちょっと待てよ……確か関羽は男だったような……

じゃあ、これはタイムスリップじゃなくてパラレルワールドに来たのか？

「どうしたのだ？」

「な、何でも無い。大丈夫だ」

「ここから迂闊には横文字とか使わないよ!」  
意味分からぬだろう。

「鈴々は姓を『張』名を『飛』字を『翼徳』なのだー。」

この子が張飛?

マジか……

何でもありだな……

パラレルワールドって……

「私は姓『劉』名を『備』字を『玄徳』と言います」

「ー。」

この子が劉備か……

成程な……

「あの聞きたいことがあるんですけど……」

「ああ、良いぞ」

「あなたが天の御遣いですか?」

「何それ?」

天の御遣いとかめちゃくちゃ胡散臭過ぎるだろ!。  
そう思つて聞いた。

すると……

「あはははは～」

「あはははは～」

張飛のお腹の虫が盛大に鳴った。

「どうやら張飛がお腹減ってるようだし近くの街に移動しようか?」

「そうだな……」

関羽さん……あんまり呆れたような顔をしてやるなよ……張飛が可哀想だよ……

街の酒家

「成程な……」

街の酒家で昼食を取りながら大体の事情を説明してもらつた。

官の腐敗していたり盗賊達が民から食料を奪っていたり飢饉の兆候

が見え始めたりと……

もう、救いようのない乱世だった所に管轄とか言つ占い師が天の御遣いが乱世を鎮めるとか言つ占いをしたらしい。

「確かに俺はこの世界の住人じゃないからな。

だから、もしかしたらお前達が求めてる天の御遣いかもな

「なら……」

「一つ…一つだけ聞かせろ」

「はい?」

これは重要な質問だ。

もし答えが俺の納得出来る物で無かつたら俺は絶対に協力しない。

「お前の理想つて何だ?」

「私の理想は大陸中の皆が笑顔でいられることです」

「それはただの『甘い理想です』え?」

「私はそれでもその理想を掲げていきます。  
ついて来てくれた人達を裏切らない様に」

その目はとても強い目だった。

それ以上その理想は甘いとは言わせないような……

「そうか……

なら協力しよう。

天の御遣いとしてな」

「ありがとうござります!」

「これからもよろしくお願ひします!」

「よろしくなのだ!」

「さてと…そんな行ぐとするか!」

そう言って俺は立ち上がる。

「アーティストの才能を引き出すためには、アーティスト自身の才能を尊重する必要があります。」

え？

「おちやつでもでした！」

は  
い  
?

「いやもうまなのだー。」

九十九

会計俺?

「——はい（なのだ）——」「——

うつえ

「あのなあ……」

俺は女将に聞こえない様に三人を集めて小声で言う。

「俺はこの世界に来たばかりなんだぞ……金なんてある訳無いだろうが……」

「え！ 嘘！？」

「じつ！声がでかい！」

「ですがどうするのですか？」

「どうするか……」

俺はそう言いながらポケットに手を入れる。すると手に違和感を感じてポケットから手を出してみる。

「そういえば……！」

俺の人差し指には二つの指輪があつた。

「そうだ！これがあつたんだ！」

「…………？」

「関羽、これを売つてくれ！」

そう言って指輪を渡す。

関羽は少しの間その指輪を見ていたが店を出て指輪を売りに行つた。

「（主人様、あの指輪は？）

「少しな……」

あの指輪は古城家次期党首の証だ。  
俺が十歳の頃に祖父から渡された。

「つてか」主人様つて何だ?「

「え? 私達の『主人様だから』主人様つて呼んでるんだよ?」

「どういづ理屈だ……」

俺がそう呴いてから少しして関羽は帰つて来て会計を済ませると女将が『あんた等の理想に心うたれたからこれを持つてきなー』と言つて酒を渡してくれた。

桃園

「綺麗だなあ……」

周りは桃の花。

桜みたいで本当に綺麗だ……

あの時……俺達も……

いつまでも桃の花を見ていられる時代を創りたいわね……

「…………  
萌琳」

彼女の名前を思わず呴いてしまったことに気が付き俺は首を横に振る。

彼女はもう居ないんだ。

いつまでもくよくなしてはいられない。

「酒なのだ——!」

「うひー！鈴々！いい加減にしろー！」

「？あの子の名前って張飛だろ？」

「あれ？天の世界には真名は無かつたの？」

「真名？」

知らぬい言葉に首を傾げると関羽が説明してくれた。

「真名と言つのは家族や親しい者にしか許さない名です。  
その者の生きやまを示す物です」

「へーなら俺もそれに等しい物持つてるな。  
でも、簡単には呼ばせられないけど他人に教えることだけでその者  
を認めてるってことになる物だ」

「ねえ、ご主人様。

私達のこととを真名で呼んで？」

「ああ、分かった」

「じゃあ、私の真名は桃香ー。」

「私の真名は愛紗と申します」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！」

「俺は守風つてのがこの世界で言つ真名に当たるかな？  
よろしく。でも、絶対に呼ぶなよ？」

「「「うん（はい）（なのだ）！」」

俺は三人が頷いたのを見て少し考える。

こうして真名を教え合い互いを認め合つて更にここは美しい桃園なのだから

桃園の誓をするべきではないかと。

その考えに至つて俺は三人にこう言った。

「結盟しようぜ。

民の為に乱世を鎮めるつて」

「「「うん（はい）（なのだ）！」」

三人は各自の盃をお掲げた。

俺もそれに続く。

「我等四人！」

「姓は違えども、姉妹の契りを結びしらは！」

「心を同じくして救い合い、皆で力無き人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

ここは本当は劉備であるが言つべき所だが桃香が俺に曰で伝えて來たので俺が言つ。

「願わくば、同年、同月、同日に死せん」とを…

有名な桃園の誓が俺を含まれて行われた……

そのことを胸に刻み俺と姉妹三人の乱世を鎮める物語が今、ここに

始まつた……

## 七話 公孫贊の元へ

俺は今公孫贊の城の玉座の間に居る。

ん？『描写を端折り過ぎだ』だつて？

それもそうだな。

まず、桃園の誓をした後どこに行くかつて話になつたんだ。  
そうしたら桃香が『この辺りの太守が私の友達なの！』って言つて  
とりあえず。

その友達の所、つまりここに来る事になつたんだ。

そこで手ぶらで行くと足元を見られるから指輪を売つて店の会計に  
使わなかつた分を使って

兵隊人達を百人程連れてこの城に来て今に至る。

そして、肝心の桃香だが……

「白蓮ちゃん～！それでね～！」

「あはははは！中々充実した毎日を過ごしてたんだな！」

かつての知り合いとの再会を喜んでいた。

ホント……こいつのことは喜んでやるべきかもしないんだけど話が  
出来ないしな……

でも、邪魔するのは何て言つか……

そんなことを考えていると柱の後から一人の少女がやつてきた。

「伯珪殿、そろそろ本題に入れずに困惑しております」

そちらの御人が本題に入れずに困惑しております

あの少女なかなか出来るな……

生糰の武人つて言つ奴か。

「ああ、そうだな。  
すまなかつたな。

私は姓を『公孫』名を『贊』字を『伯珪』と言ひ。  
よろしく頼む」

「私は姓を『閻』名を『羽』字を『雲長』」

「鈴々は姓を『張』名を『飛』字を『翼徳』なのだ！」

「俺は古城矢吹。

天の御遣いだとか言うもんに成り行きでなつたもんだ」

「はあ？ 天の御遣いって管轄の予言だろ？  
与太話じやないのか？」

「ああ、それでも俺は天の御遣いって言ひ『役』を演じることになつたのさ」

「？」

あ、『いいつ駄目だ。

これで意味分からないとかこの乱世生きていけないわ。

「伯珪殿、この御人は劉備殿を助けるこの四人の手助けをする為に  
天の御遣いと言ひ名を使うことにしたのですよ。  
時に古城殿」

「何だ？」

「あなたは北郷一刀殿と言つ方と知り合いでですか？」

え？今こいつ……何て……？

「一刀って言つたのか？」

「はい。

それが何か『どじ』あつた！？』？！」

「どじであいつと会つた！？

あいつは元氣だつたか！？」

「お、落ち着きくだされ！

北郷殿は見た限りお元氣でした！

北郷殿とは陳留の郊外で出会いました！」

おつと、つい、感情的になつてしまつたか。

「悪いな。

一刀は俺と親友なんだ。

色々あつて離れ離れになつちまつてな。

それで感情的になつたんだ」

「そうですか。

手掛けりが合つて良かつたですね」

「ああ

あれ？本題から凄く遠のいてるな……  
どう修正しよう……

「ところで桃香」

「何? 白蓮ちゃん?」

「本当の兵士は何人居るんだ?」

あつつい?

ばれてる~...

ここは正直に言つべきか....

「すまん.....本当の兵士は居ないんだ。  
でも、全力で仕事するからここに置いてくれー!」

「あ、ああ。

ここは人手が足りないからむしろ歓迎するよ。  
よろしく頼む」

つしゃああああつ~

首がつながった!

これで駄目だとか言われたらどうしようかと思つたせ.....  
さて、一刀がこの世界に来てるなら終夜も来てるだろ? な.....  
一刀.....終夜.....お前等どうしてるんだ?  
俺はそう心の中で一人に尋ねた。

## 八話 大徳を持つ者達の初陣（前篇）

侍女に連れられて来て見たのは城門の傍に陣る武装した兵士。その光景を見て今から戦をすることを予感させた。

「……どうしても思い出しちまつた」

俺は頭を横に降つてあいつのことを頭から追い出す。変なことを考えていたら負けるのが目に見えてくる。

「す」「——これ全部白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

「ああ、でも、半分は義勇軍半分だけどな」

それだけ義勇軍が集まつたと言つことはそれだけ大陸の情緒が乱れ大陸の人達が危機感を感じていると言つことだらう。この大陸はどうなることやら……

「古城、お前達は左翼の部隊を率いてくれ

「あ？ 分かった」

「いいつ隨分剛毅だな。

それだけ信用されてるつてことかな。

「じゃあ、口上に行つてくれる」

「頑張つてね、白蓮ちゃん」

「ああー。」

公孫贊は軍の先頭に立つて口上を始めた。

「諸君ー！よいよ出陣の時が来た！」

今まで幾度となく退治してきた盜賊共ー！

今日こそ殲滅してくれよう！

公孫の勇者よー！今こそ功名の好機ぞ！

各自存分に手柄をたていー！」

「ひおおおおおおおー！」

大地を揺るがす鬨の声を聞いていた公孫贊が

「出陣だー！」

出陣の号令を出した。

意氣揚々と城門から出発する兵士と共に俺達も隊を率いて出陣する。すると桃香が心配そうな顔でこいつ聞いてきた。

「（）主人様、天の世界に戦はあった？」

「無かつたぞでもな……」

「無かつたぞでもな……」

「戦は初めてじゃない」

「え？」

桃香は意味が分かっていないうらしい。  
まあ、それはそうだろうな。

「こいつか話すや」

俺としては絶対に話したくないけど……  
そんなことを思つてこると

「全軍停止！これより我が軍は鶴翼の陣を敷く！  
各員衆々と移動せよ！」

本陣からの伝令が命令を伝えながら前線に向かつて走つて行つた。

「兵の指揮は俺と……愛紗に任せて良いか？」

鈴々を選ばうとしたけどなんかなあ……

「はつーお任せくださいー！」

「鈴々は？」

「桃香を守つてくれ」

「分かったのだ」

あれ？鈴々は『そんなの嫌なのだー』とか言つ子だと思つてたんだ  
けどな……

まあ、良いか。

今は兵の士氣を上げ無いと。

「聞け！劉備隊の兵どもよ！敵は組織化もされていない雑兵共だ！この戦で負けることは許されない！負ければお前達の守りたい者は盗賊の好きにされてしまつ！守りたくば盗賊共に勝て！そして生き残れ！」

「つああああああああつー。」

「全軍戦闘態勢を取れ！」

愛紗の号令と共に兵士達が抜刀する。

俺も童子切を抜刀する。

そして……

「盗賊達が突出してきました！」

緊迫した面持ちの伝令が本陣に向かつて疾走して行つた。

「古城隊、行くぞー！」

「关羽隊！我等も行くぞー！」

全軍突撃いいいいいいいっ！

そして俺達の戦が始まった。

## 九話 大徳を持つ者達の初陣（後編）

今は戦の後。

愛紗の活躍があつて敵はどんどん倒されていった。

一方俺はと言つと……

「『』主人様す『』かつたね～敵をどんどん倒して」

桃香はそう言つてくれているが実は違う。

「そんなこと無いって。

殆んど愛紗の活躍だつたから」

そつ、殆んど愛紗が敵を倒して活躍の場なんて全く無かつた。

「いえ、『』主人様の武に比べ私の武など足元にも及ばないでしきう

彼の関雲長にそう言わると何だかくすぐつたい。  
すると趙雲が俺を見ているのに気付き話しかける。

「さつさから俺を見てどうしたんだ？」

「いえ、あなたと一度手合わせしてみたいと思いまして」

「えー？」

まじかよ……彼の趙子龍と戦うなんて出来る訳無いだろ？  
何とかしないと……

「俺は絶対に戦いたく無いな」

ストレートにズバッと言えば大丈夫……の筈だ。

「そう言わずに」

駄目だつたああああつ！

この戦闘狂め！

「何か失礼な」と思いましたかな？」

「思つてねえよ」

つたく……

勝手に心を読みやがつて……

「それより趙雲殿。

最近おかしいとは思わないか？」

愛紗のその言葉を聞いて趙雲の纏つている雰囲気が変わった。

「確かに、最近匪賊共の動きが活発化している」

「そりだつたら飢餓も起つるだろつな」

「収穫した食べ物が奪われちゃうんだから飢餓が起きるのは当たり前なのだ」

「それと共に国境周辺で五胡の影もちらついてる。何かが起つるとしているのは確かだな」

三人の言葉をまとめるとこれから大きな動乱に繋がると言つことだ。

無論そうなるだろう。

これから様々な波が流れる。

相当大きな波が……

そんな中で俺達はどうやって立つて行くのか。

それが一番重要なことだ。

俺はそんなことを思いながら蒼い、それでいて不気味な空を見上げた。

## 拠点話 矢吹篇 part 1

「おーりあーつー！」

「くつー！」

俺は今趙雲と仕合している。  
事の始まりは一時間前だ。

いきなり趙雲が部屋に来たと思つと  
『古城殿！仕合して頂きたい！』と抜かしてきて一時間程説得を試  
みたが失敗。  
結局今に至る。

因みにギャラリーは桃園組全員と若干影が薄い普通の人。

「影が薄いとか言つな――――！」

今聞こえた事は無視しよう。  
まあ、そんな訳で戦つてゐる訳だ。  
状況としては俺が有利だ。

「はあーつー！」

「甘いー！」

確かに趙雲の槍の速さは厄介だ。  
それでも……

「軽いー！」

「ぬぐつー。」

厄介なのは速さだけ。

何とか受ければ後は弾ける！

俺は趙雲の槍の先の開いている部分に刀を挟み思いつきり手首を捻る。

すると槍が傾き趙雲は体のバランスを崩す。

「むつー。」

俺は素早く刀を趙雲の槍の先から抜いて趙雲に突きつける。

「俺の勝ちだ」

「負けました……」

俺は童子切を鞘にしまって皆の所に近づく。

「（主人様す）（いよ）ー。」

と、桃香。

「素晴らしい武でした」

と、愛紗。

「お兄ちゃんー！今すぐ鈴々と仕合つのだ

と、鈴々。

「いや～まさか、勝てるなんて思わなかつたぜ。  
途中何回もひやひやした～」

俺はそう言いながらテーブルに突っ伏した。  
本当に疲れた……

「古城殿、私の真名をあなたにお預けしましょ～」  
「あ？ 良いのか？」

「ええ、あなた程の武を持つお方なら構いません」

「なら、俺も教えるかな。  
つっても俺の場合 説明中 つてことだからな」

「分かりました。

私の真名は『星』と申します」

「俺の誓名は守風だ」

俺はそう言って手を前に差し出す。  
星はその手を強く握った。

「真名を交換したところで古城殿。  
もう一度仕合いましょう」

恐るべし……戦闘狂。

「分かつた……もう一度だけだぞ」

そして俺はもう一度仕合つことになったのだがその後愛紗や鈴々と仕合うことになり最終的には三人同時に仕合伸ばしてしまい次の戦では俺一人で三人の部隊を俺が率いることになってしまったのは余談である。

## 十話 それぞれの道へ（終夜編）

「くつ……」

身体中が痛い……

高い所から落ちたのだろうか？

「ルルは……どうだ？」

目を開けると完全な荒野。

俺の記憶では日本にこのような所は無い。

「拉致でもされたか？」

そう考えて首を横に振る。

上から鉄骨が落ちて来たのだ。

拉致なんてされる訳が無い。

普通ならば俺達は原型も留めていない程に残酷な骸になつてているだろつ。

では何故俺はここに居る？

一刀と矢吹はここに居ないようだがあの二人はそう簡単に死ぬような奴らでは無いだろう。

「俺の名前は瀧終夜<sup>せりひやく</sup>……聖フランチエスカ学院一年……部活は所属していない……

上から鉄骨が落ちて来て……そこで意識が無くなつた」

ここに来た経緯以外の記憶の欠落は無い。  
記憶喪失と言つ訳では無さそうだな。

他に何か変わったことは……」

俺はそう思い自分の周りを見る。すると、近くに一振りの刀が落ちているのが目に入る。

「これまさか……『大包平』！？」

大包平おおかねひらは、平安時代の古備前派の刀工包平作の日本刀（太刀）。国宝に指定されている。日本刀の最高傑作として知られ、童子切安綱と並び称され、『日本刀の東西の両横綱』と例えられることがある刀だ。

俺の祖父が気に行つたとか言つて買い取つた。（矢吹の家とは違ひきちんと買い取つた）

「何故ここに……」

本家に保管されていた筈だが……

それに俺は事故にあう直前にこんな物は持つていなかつた筈だ。

「ふむ……む？」

悩んでいると向うから一人の女が歩いてきた。

「隠れた方が良いか」

ここがどこか分からぬ以上面倒なことになる可能性がある。

そう思つて近くの岩に身を隠す。

そして先程俺が居た場所の近くに一人の女性が現れた。

「最近いい加減に袁術に使われるのも疲れてきたわね」

袁術？確かに三国志の登場人物だったな。

三国志関係の映画の撮影だろうか？

俺がそんなことを思つてゐる間にも一人の話は続いて行く。

「そう言えば策殿、こんな占いを知つておるか？」

さく？サク？もしかして策か？ならばあの女性は孫策か。  
といふことはもう一人の女性が黃蓋か周瑜だろうか？

「何々？」

「天の御遣いが黒点を切り裂き流星に乗つて現れる天の御遣いがこの大陸の乱世を鎮めると占いじゃ」

む？三国志や三国志演義にそんな者は登場していなかつた筈だが？  
それに今氣付いたが孫策は男の筈だ。

なのに策殿と呼ばれているのは女性……もう少し様子を見るか。

「まあ、そんな話でも私達の独立の切欠になつてくれたら嬉しいんだけどね」

もし、本当にこの時代が三国志の時代ならば神を恨むしかないだろう。

だが、今更恨んでも遅いだろ？

「ぐつ！」

少し動いた所為で身体中に痛みが走つた。

その所為で少し声が出てしまった。  
その声が聞こえていたらしい。

孫策らしき女が剣を抜いて叫んだ。

「誰!...?」

俺は仕方なく岩の後から出る。

「あなた誰?」

このままで俺の命が危ない。

そう思った俺は大包平を抜いて構える。  
それを見た孫策らしき女性も剣を構えた。

「祭、この子相当やる子よ。  
手は出さないで」

「承知……」

そう返事をして祭と呼ばれた女性は孫策らしき女性から少し離れた。  
俺はそれを見て孫策らしき女性に襲い掛る。

「くつ!...」

ガキンッ!

孫策らしき女性は何かそれを防ぐ。

俺は孫策らしき女性から少し距離をとる。

「つ!...」

全身に痛みが走り俺は立てなくなつた。

ここまでか……

だが、女性は俺に斬りかかつて来ない。

「あなた、怪我をしてるの？」

「ああ、高い所から落ちたのが全身ボロボロだ」

お互に警戒しながら喋る。

立てなくなつたとは言え刀を振るくらいは出来る筈だ。

そんなことを思つていると女性が剣を鞘にしまといつて言つた。

「あなた『天の御遣い』を演じない？」

「は？」

孫策の城の一室

「大体の事情は把握した」

簡単にまとめればこうなる。

孫策の母親は戦で死に彼女達は力を失つた。

そして今は袁術の客将として伏する龍として天に飛ぶ時を待つているらしい。

そんな時管輅が『天の御遣いが乱世を鎮める』と言つ占いをしたらしい。

「俺が生きていくにはどうやらその天の御遣いを演じなくてはいけないだろう」

この大陸で生きていく術は俺には無い。  
だからこそ受けた方が良い。

「なら？」

「ああ、天の御遣いを演じる。  
それより今日はもう寝て良いか?  
正直こりやつて喋っていることが辛いんだ」

さつき刀を振っていたがそれは気力で頑張っていた。  
寝れるならば寝るに限る。

「良いわよ。  
その代り明日は尋問があるからね」

「ああ、構わない」

俺はそう返事をして目を瞑り意識を手放した。

十話 それぞれの道へ（終夜編）（後書き）

流石に短いので修正しました。

## 十一話 異聞（前書き）

こんにちわ～

今日は台詞が多いです。

地の文が少ないです。

本当に「めんなさい」…

では、始まり～

## 十一話 尋問

俺は今尋問をされる為中庭に居る。

中庭で行つ理由は恐らく盜み聞きをしている奴が良く見えるからだろつ。

まあ、それ程あいつ等も大変だと言つことか……

そんなことを考えていると孫策と黃蓋が一人の女性を連れて來た。一人は呑氣そうで良く分からん女性。

もう一人は……なつ！

「ほつ……りん……？」

俺はそう咳いて首を横に振る。

いくら似ていても彼女じやない。

彼女な訳が無いんだ。

俺がそんなことを考えていると孫策が手を振つて來た。

俺も一応手を振り返す。

「もう怪我は大丈夫？」

「一日やそこいらでは治る怪我で無い。

昨日よりはまだマシだがな」

「そう、それより紹介するわね。

あなたの尋問を担当する陸孫と周瑜よ

「よろしくお願ひします～

何だか呑氣な声だな。

「これが本当にあの有名な軍師か？」

「周瑜だ、よろしく頼む」

あの美周郎か。

成程。

「ナニヤウタナ漏終夜だ。

お前達への協力は惜しまない。

よろしく頼む」

「それも尋問しだいだがな」

確かに生き残れるか首を刎ねられるかは俺次第だろ？  
だが

「生き残れるや。

俺にはその自信がある」

「ほつ？…ならばその根拠を教えてもらおうか」

俺は周瑜に言われ生き残れる根拠を話し始める。

「お前達は袁術から独立したいと思つてゐるだろ？…

その為には力が欲しい筈だ。

無論俺を妖として斬り捨てて名誉を上げるのも良いだろ？

だが、例えそれをしたとしても袁術がお前達の領土を返還する筈がない。

お前達を利用し尽くすだけだ。

もし袁術を倒して独立出来たとしても乱世の中でお前達が生き残れ

るかどうかは分からぬ。

ならば、怪我をしながらも孫策とやり合えた俺を仲間にして確立を少しでも上げた方が良い筈だ。

何せ天の御遣いとか言うのはあと一人居る筈だからな

「何だと？」

「天の国で俺が消えた状況下ではもう一人仲間が居たんだ。だから、あいつ等もこちらに来ていると思った方が良い。それに天の国と言うのはこの時代から千年後以上も先の世界だ。だからこれからどうなるかと言うのは知つていい

「何と……では、後の二人も？」

「ああ、だからお前達は簡単に倒せる」  
俺がそう言つと周瑜は思案顔になつた。  
そしてしじみぐしくして

「分かつた。

完全には信用できないが私達はお前を利用しようつ

「良いや。俺もお前達を利用する。  
生きる為にな」

俺がそう言つて笑うと周瑜も少し笑つた。  
すると

「ねえ~終わった?」

「長つたるしい尋問は終わつたか？」

孫策と黃蓋が酒を飲んでいた。

陸孫は引き攣つた笑みを浮かべている。

「周瑜……」

「何だ？ 濁」

「お前も苦労しているんだな」

「……分かつてくれるか」

「ああ」

昔不良に絡まれた時に一刀と矢吹は不良の悪口を言つて不良を刺激した。

その時結局は俺達は戦つことになり警察に連行された。

「少し苦労していの同士話もないか？」

「やうだな……」

その後俺と周瑜の間で『苦労人同盟』が結ばれたのは余談である。

## +1話 黄巾党に対する余讃（漫畫也）

すこません……今回も短いです……

## 十一話 黄巾党に対する会議

今俺は周瑜に呼ばれ中庭に来ている。

秘密の軍議ならどこか人気の無い部屋でやれば良いだらうと思つたが

どこかで袁術の目が光つてゐるんだらう。

確かにここならば盗み聞きしてゐる奴が良く見えそうだ。  
因みに孫策は袁術に呼ばれここには居ない。

「現在、荊州で暴れている黄巾党は北の本隊と南の分隊の一いつだ。  
兵も金も兵糧も無い我々とすれば、南の分隊にあたりたい所だが袁  
術のことだ、本隊に当たれと言つてくるだらう。  
そこで……瀧、お前の意見を聞かせて欲しい」

「いきなりだな」

まあ、協力を惜しまないと言つたから協力はするがな。

「ふむ……袁術に兵をと金と兵糧を出させれば良いだらうへ。」

「「「は?」」」

そこだその反応をするか。

まあ、しょうがないことだがな。

俺はそう思いながら説明を始める。

「まず袁術に本隊と当たる代わりに兵と金と兵糧を出せと交渉する。  
それが駄目ならば袁術よりも早く南の分隊を撃破する。

そうすれば太守としての面子がある袁術は本隊を相手にする」とこ

なる

俺はある程度説明し終わり茶を啜る。  
……日本茶が懐かしくなった。

「……誰があるー。」

俺が茶を飲んでこると黄蓋が兵を呼んだ。  
どうやら採用と言つことらしい。

「はつー。」

「策殿に伝令を放て、手紙の内容は　」

黄蓋が兵士に指示を出している間周瑜が俺を見ているのに気が付いた。  
何だらうと疑問に思い尋ねてみる。

「何で俺を見ている?」

「いや、良い拾い物をしたなと思つてな

まさか、物扱いされるとは……心外だ。

「潺、お前、武はどれ程だ?」

「化け物一人とつむんでいるからな。  
それなりにはある」

あの化け物一人と付き合つていると否応にも強くなってしまった。  
あの二人と互角に渡り合える俺も化け物なのだろうか?

「そりか……ならばお前にはいつか部隊を預けたいな」

「名前だけだが天の御遣いが率いる部隊か……庶民が食い付きそつ  
なネタだ」

「こいつは思ったより性格が悪いかもしれない。

そんなことを思つてこると黄蓋が兵に指示を出すのを終えていた。

「さて、具体的な戦術だが……簡単だ。

圧倒的な戦力の差を覆すことができ更にこちらに被害が少ない戦  
略が一つある」

「そんな便利な策つてありますか～？」

「あるぞ。人として考えさせられる策だが……盗賊相手には遠慮は  
要らないだろ？」「

「そりだな、それで？その策とは？」

俺は残つてゐる茶を飲んでこいつ言つた。

「火を使うんだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4104x/>

---

三人の天の御遣い・改

2011年11月26日21時50分発行